2025 年 3 月 29 日　緑爽会講演会

名山の国際化･今昔物語

～日本の山に登る外国人登山家の、現在、過去、未来

本日は、緑爽会の方々の助けをお借りして、このテーマに落ち着きました。過去に外国人たちはどのように日本の山々を探検したか、現在、どのような山行を行っているか、そして将来、彼らが、どんな山行を考えうるか、ということです。

過去について言えば、ウォルター・ウェストン（1861-1940）から始めなければなりませんが、緑爽会会報で、JAC の幹部がウェストンに絵巻物を贈った話を読みました。ところがなんと、彼はイギリスに帰国したときにこの素敵な贈り物を紛失してしまったようで、全くもって恥ずかしい限りです。深くお詫びするしかありません。(笑)

ウェストンはあまりにも有名なので、彼のことを詳しく語る必要はないでしょう。彼が初めて来日したのは 1888 年です。槍ヶ岳などに登り、後に、小島烏水とお茶を飲み、日本に登山クラブを作るというアイデアについて話し合いました。それが 1905 年 10 月、JAC 設立に繋がります。そうした功績から、ウェストンは日本の現代登山の父と呼ばれることがよくあります。でも、本当にそうだったでしょうか？ 外国人はウェストンの一世代も前に日本に登山に来ていました。

1860 年 9 月 4 日、英国初代駐日総領事のオルコック（Rutherford Alcock 1809～97 年）が富士登山に出発しました。彼と 7 人の英国人同僚と、幕府の役人約 100 名が、30 頭の馬と共に同行しました。オルコックの飼い犬トビーも一緒でした。

オルコックの主な目的は政治的なものでした。1858 年の日英条約で得た自由旅行の権利を主張するためです。でも、政治だけの問題ではありませんでした。その一行には植物学者のジョン・ヴィーチ（John Veitch 1839～70 年）がいました。ヴィーチは富士山でシラビソを「発見」し、自分の名にちなんで「Abies veitchii」と名付けました。

9 月 11 日、彼らは全員登頂しましたが、そこで、ロビンソンという海軍中尉が誤って富士山の高さを 4000 メートル以上と計算してしまいました。また、悲しいことに犬のトビーは熱海の間欠泉の噴出で死んでしまいました。今でも熱海にはトビーの記念碑があります。

当時は外交官だけが自由に移動できました。オルコックの登山から 6 年後、スイスの外交官ブレンワルト（Caspa Brennwald 1838～99 年）が 2 度目の外国人による富士登山を率いました。

外交官の次には博物学者がやって来ました。ロシアの植物学者カール・ヨハン・マキシモヴィッチ（Carl Johann Maximowicz 1827-91）は 1860 年前半に日本に到着し、その後 2 年間、北海道から九州まで歩きました。雲仙、阿蘇、九重などの山々も登りました。植物の標本が詰まった箱を 72 箱も本国に送りました。ちなみに、これらの標本は今でも博物館で見ることができます。

もちろん、アーネスト・サトウ（Ernest Satow 1843-1929）については先に触れるべきでした。外交官として、彼は日本の山々を探検した最初の外国人の一人でした。1862 年から 1883 年迄の最初の任期中、幅広く本州の山を登りました。例えば、英国人として初めて南アルプスの農鳥岳と間ノ岳を訪ねました。また、彼は植物にも興味があり、竹の栽培に関する論文を書いたこともありました。

でも、他に 2 つ、彼が日本の登山に貢献したことがあります。まず、彼は JAC の創設者であった武田久吉（1883 年～1972 年）の父だったことです。そして、2 つ目は、1881 年に発行されたマレーの日本旅行ハンドブックの編集に協力したことです。このガイドブックは発行者に因んで「マレー」と呼ばれました。

ここでウェストンの話に戻ります。彼は九州と本州を旅行する際に、マレーのガイドブックを使用して、後にその改訂に協力しました。ウェストンは、鉄道も可能な限り利用しました。そのため、1890 年代でさえ、ウェストンの登山には、ガイドブックと効率的な交通機関という、かなり現代的な趣がありました。でも、もちろん、山小屋や現代の地図はまだありませんでした。

では、日本山岳会が結成された後、何が起こったのでしょうか。まず、日本山岳会のメンバーが開拓者になりました。そのため、ウォルター・ウェストンが 1914 年 8 月に大天井岳を縦走したとき、ウェストンは小島烏水の足跡をたどっていたのであって、その逆ではありませんでした。ところで、ウェストンは、北アルプスに向かって列車で旅行中、新潟海岸沿いの新しい油田を見て大きなショックを受けました。

時代は変わったのです…。(この点については、後の質疑応答の中で南川会員から質問あり。なぜがっかりしたのかと。それはイギリスの産業革命後のように2度目の来日で10年の間に環境が悪化していたからだろうとの回答。南川会員からは、JAC設立の一人、高頭仁兵衛はこうした油田資本家など関係者を多く入会させているとの情報をいただいた)

時代が変わった大正時代(1912～1926年)　この時代は、山小屋が建てられ、道が作られ、ガイド協会が結成され、誰もが山に行けるようになりました。日本山岳会のメンバーは海外遠征を開始しました。特に、1921年にアイガーのミッテルレギ稜で、槇有恒がパイオニアワークを行ないました。ちなみに、槇有恒にグリンデルワルトに行くことを勧めたのはウェストンでした。

では、外国人はどうだったのでしょうか。何人かはJACに参加しました。調べた限りでは、JAC設立初年度、11人の外国人会員がいました。ウェストンのような英国教会の牧師が2人、大学教員が2人、残りは東京、横浜などのビジネスマンでした。

外国人女性もJACに入会しました。おそらく1923年までにウェストン夫人を含めて4人。興味深いことに、夫人がイギリスに戻ったとき、彼女はイギリスのアルパイン・クラブには入会できず、代わりに別のレディース・アルパインクラブに入会しなければなりませんでした。JACも、正式には、1949年まで女性を受け入れませんでしたが、それでもイギリスのアルパイン・クラブ(1974年)やスイス・アルパイン・クラブ(1980年)より25年も先を行っていました。これもまたパイオニアワークでした！

外国人は独自の協会も設立しました。これはMountain Goats of Kobe（神戸のマウンテン・ゴーツ）で、六甲山でよく訓練していました。MGKがいつ創立されたのかは定かではありませんが、機関誌「Inaka」は1915年に初めて発行され、ほぼ10年間続きました。編集長はアメリカの石油会社に勤めていたドーン（H・E・Daunt）氏です。彼はJAC会員でもあり『山岳』の英語のページを編集していました。

「Inaka」はよくできていました。地元の新聞社が印刷したものです。そこには、良い内容がいくつかあります。例えば、1915年の「Inaka」第2巻には、アメリカ人宣教師ジェイ・マール・デイヴィス（J Merle Davis）による焼岳噴火の目撃証言が載っています。

神戸にはMGK以外にも会がありました。神戸徒歩会は 1910年に神戸草鞋会として設立されました。一時は会員の3分の1以上が外国人で、その機関誌「Pedestrian」には英語と日本語の記事が掲載されていました。

もちろん、山岳会がすべてというわけではありません。山岳会に入ることに興味がない外国人もいました。そのような一匹狼の一人がオールド・リーズ（Thomas Orde-Lees 1877-1958)でした。今日では彼は「アドレナリン中毒者」と呼ばれるでしょう。彼はシャクルトンの悲惨な南極探検隊で倉庫係を務めました。

第一次世界大戦の終わりには空軍に所属し、パラシュートの使用を推進しました。パラシュートの有効性を証明するため、彼はタワーブリッジからテムズ川に飛び込んだこともありました。

戦後、彼は日本にやって来て、霞ヶ浦基地でパラシュートの技術を教えました。その後、彼は冬季に富士山に登ることを思いつきました。1922年2月、2度目の挑戦で、彼らは自家製のアイゼンを使って、イギリス人の友人と共に登頂しました。登頂の印として、彼らは山頂小屋近くの岩に「アブロ機の舵棒から取ったアルミ製の足置き」を結び付けました。

オールド・リーズの富士登山は、日英同盟（1902～23年）の副産物でした。彼が日本に来たのはそのためです。私たちは、登山は下界より上を浮遊していると考えがちです。でも、実際は登山家は他の人たちと同じように歴史の一部です。一匹狼でさえもです。

日英同盟といえば、1900年から1923年の間に、英国アルパイン・クラブの会長が3人も来日して、もちろん日本山岳会は彼らを温かく迎えました。その中でも最も著名なダグラス・フレッシュフィールド（Douglas Freshfield 1845～1934年）は1913年10月に日本を訪れ、妙義山に登りました。彼もマレーのガイドブックを使い、ウェストンのアドバイスに従いました。彼の写真をいくつか紹介させてください…。〈ここで画像が映された〉

フレデリック・スター（Frederick Starr 1858-1933）は、さらに大きな謎を提起しています。スターは、シカゴ大学で30年以上にわたり、人類学を教えていました。スターが初めて来日したのは、アイヌに興味を持った1904年のことでした。それに、蝦夷地を探検した松浦武四郎の短い伝記（1916年）を書きました。その後、スターはお札の収集を始めました。これにより、彼は「お札博士」というあだ名を得ました。また、スターは富士山にも行きました。彼は1913年に山麓を歩き、1917年と1919年には山頂に登り、同じ年に御中道巡りをしました。彼はこれらすべての登山を巡礼者の衣を着て行いました。なぜ巡礼者の衣を着て登ったのかは、本にも書いておらず、謎です。彼は曽我部一光という人物に富士山を案内してもらいました。彼らは研究会である納札会で知り合いました。曽我部は富士山を愛し、ほぼ100回登っていました。曽我部は1919年に富士山に関する本を書き始め、生涯にわたる富士山の研究をまとめるつも

りでした。曽我部はこの知識を惜しみなくスターに提供してくれました。1923 年 8 月 31 日、彼はスターを訪ね、自分の原稿を見せたいと言いました。そこで 1 か月後に再び会い、丸一日曽我部の原稿を見ようじゃないかと約束しました。

ところが、スターと曽我部が再び会うことはありませんでした。9 月 1 日の関東大震災で曽我部の家は全壊しました。彼はその後の火災から原稿を救おうとして亡くなってしまいました。1924 年、スターは自身の著書『富士山』を曽我部に捧げました。これは悲劇的な物語であり、多くの疑問が残ります。曽我部とは誰だったのか？そして、どんな本を書こうとしていたのか？ スターは 10 年後東京で亡くなりました。富士山須走ルートの浅間神社の上には彼の記念碑があります。

関東大震災以降　関東大震災は歴史の分岐点となりました。その後は外国人登山家が書いたものを見つけるのは難しい。一つの例外は、1934 年に出版されたウォルトン（Murray Walton1890 年生まれの宣教師）の『日本と台湾の登山』です。ウォルトンは台湾の新高山などに登り、日本アルプスにも登りました。少なくとも 15 年間、JAC の誇り高い会員でした。

ウォルトン以降、日本に滞在する外国人登山家たちはさらに静かになりました。活動が減少したのは事実のようです。ウォルトンの本の序文を書いた小島烏水はこう述べています。「しかしながら、近年、登山に関心を持つ外国人居住者は減少している。彼らの熱意も低下しているようだ」と。

確かに、外国人登山家たちが熱意を取り戻すのには長い時間がかかりました。1950 年代から 60 年代にかけて、日本ではハイキングや登山が大いに復活しました。

でも、このいわゆるマナスルブームのとき、外国人はどこにいたのでしょうか？ 少なくとも英語では、この数十年間に日本の山について書かれたものはあまり見つかりません。そして、外国人向けの日本の高山に関する最新のガイドブックもありませんでした。私の知っている限りでは。

日本の山に対する外国人の関心が再び高まった最初の兆しは、ドイツのハンブルク大学のベンル（Oskar Benl 1914-86)からでした。 1979 年、彼は井上靖の『氷壁』をドイツ語に翻訳しました。ベンルは戦前に東京大学で学び、1943 年に能楽師世阿弥に関する研究で博士号を取りました。『源氏物語』も訳したということです。

1988 年、ようやく新しい英語のガイドブックが出版されました。それは地質学者ハント（Paur Hunt）による『Hiking in Japan』です。ハントは 10 年前に日本にやって来て、日本海で石油を探索するチームに加わりました。ハントは著書の中で、東京にある International Adventure Club（IAC)を含むいくつかの山岳関連団体について言及しています。

平成はじめかその頃、いくつかの International Adventure Club を通じて、外国人登山家たちが集まりました。実際、私もその一人でした。このメンバーたちには登山の経験が少しありました。日本アルプスのクラシックルートをいくつか試してみたいと思いました。

その後、あるメンバーが、IAC Alpine も日本勤労者山岳連盟に加入したらどうかと提案しました。私たちは 1992 年の初めに労山に加入し、新宿ブロックにある約 70 の山岳会の 1 つになりました。山田さん、ありがとうございました！（山田秀喜さんは会場にお越しで、フッドさんの東京時代の山仲間）

それ以降、私たちのクラブのスケジュールは、おそらく他の労山クラブと同じようなものになりました。11 月は富士山で雪上訓練、1 月から山スキー、ゴールデンウィークは合宿、6 月はロック・クライミングと沢登り、8 月はアルパイン・クライミングの合宿、などです。

当時、私たちは神戸マウンテン・ゴーツや神戸徒歩会について聞いたことがありませんでした。（申し訳ありません）日本人と外国人が混在する登山クラブというアイデアは、当たり前のように聞こえるかもしれません。でも、そのようなクラブは、あまり頻繁には現れないようです。大正時代の日本と平成初期の日本の状況は、似たようなものだったのでしょうか。いずれにしても、私は現在、そのようなクラブを知りません。では、今日現在と何が違うのでしょうか？

今日の大きな違いは、インターネットとソーシャルメディアです。これにより、IAC Alpine などのクラブの必要性は減るかもしれません。なぜなら、YAMAP などを通じてパートナーを見つけたり、山の状況に関するすべての情報をオンラインで手に入れることができるからです。

外国人は、岩登りを含め、日本で登山を続けています。英語での登山情報の重要な情報源の 1 つはグラント（Tony Grant）の「Climb Japan!」というウェブサイトです。グラントは英国でロック・クライミングを学び、その後ポーランドでアルパイン・クライミングを始めました。20 年ほど前に来日した頃から、彼は他の外国人と日本人の友達と一緒に登山を始めました。

彼はウェブサイトで自分のルート解説を発表しています。そして、槍の北鎌尾根、谷川岳一ノ倉沢の中央稜と南稜、白馬主稜など、人気のルートを選んだ本も出版しました。

もう１つの大きな変化は、外国人登山家の間で日本百名山のブームが起こったことです。彼らのほとんどは、2001年に出版されたロンリープラネットの「Hiking in Japan」で最初の刺激を受けました。この本では初めて英語で百名山の紹介がありました。

ところで、今では200座や300座の名峰を目指す外国人登山家もいます。そのうちの一人は「グレース・ザ・ヤマホリック」と呼ばれるブラジル人女性です。つまり、「外国人」はもはや「アメリカ人」や「ヨーロッパ人」だけを意味するものではありません。

日本百名山の最高の英語での情報源の１つは、ウェズ（Wes Lang）の「Hiking in Japan」というウェブサイトです。そこには、名山ごとに必要な情報がすべて掲載されています。ウェズは2008年に聖岳で百名山を完登しました。この動画でウェズに自己紹介してもらいましょう。

〈ここでウェズ自身が話しながら聖岳を登る動画が上映された〉

今お聞きになったとおり、このビデオが作られたちょうど１年前、ウェズは心臓の大手術を受けました。生まれた時から抱えていた問題だったのです。彼はその手術から回復しながら、最後の15座を登ったのです。ウェズは頑張り屋と言えるでしょう！

でも、ウェズにとってはそれだけでは十分ではありませんでした。ロンリープラネットガイドが絶版になったことで空白があると感じた彼は、イギリス人の友人トム・フェイと一緒に、日本アルプスと富士山のハイキングに関するガイドブックをまとめました。2019年に出版され、現在では日本の高山を英語で紹介する唯一のガイドブックとなっています。

これまで見てきたように、ガイドブックは非常に影響力があります。マレーの日本旅行ハンドブックはウェストンの道を切り拓き、ロンリープラネットのガイドブックは外国人の間でミニ百名山ブームを引き起こしました。なお、フェイとウェズ・ラングのガイドブックがどのような影響を与えるか知るのは時期尚早です。何かが起こるでしょう。

そして、これが未来につながります。

ガストン・レビュファ(1921-1985)という有名なフランスの登山家は、未来は過去よりも重要であるべきだと言いました：「夢を抱くことは常に必要だ。私は、思い出よりも夢を好む。」と。

明日の日本の外国人クライマーたちは、どんな夢を抱くのでしょうか？

時々、風景をまったく新しい方法で読み解く人が現れます。例えば、百名山を「人力」だけで完登した田中陽希のような人です。あるいは、黒部峡谷をすべて単独で遡行した志水哲也です。外国人登山家もどういうふうにその想像力を活かせるかを見たいと思います。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答で、一番好きな山は？と聞かれて白山と即答されたが、それは奥様の晴美さんが福井の方であるからで、「他に答えることはできません」と話された。フッドさんが東京時代、毎週のように一緒に山へ行かれていた山田様は「久々にマーティン節を聞いた」と発言されるなど、講演はユーモアを交えたお話しで、和やかな時間となった。大森久雄さんからは「ぜひ『山岳』に載せてほしい」とのメッセージがあった。最後に、橋本会長に一言いただき講演会を終了とした。　（構成：荒井正人、写真：石塚嘉一）

講演を終えて（前列だけ紹介します、左から）
大森安恵さん、大森久雄さん、山田晴美さん、フッドさん、橋本しをり会長、大幡裕さん(深田久弥山の文化館)